

まえがき

『平川祐弘著作集』は二〇一六年春、勉誠出版の好意溢れる申出で、全三十四巻本が企画され、秋から刊行が開始されたが、第十一回の配本が終った辺りで問題が生じ、勉誠出版から著者に来信があり、協議の結果、予定を変更、巻数を縮小、全十八巻で二〇一九年中に刊行を完結することとなった。これは版權問題（『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク——中村正直と『西国立志編』』）や、とくに他社から多数出まわった、価格の高い平川本とのアマゾン市場でのバッティングという難題が生じたためである。それで当初は刊行が予定されていた、時事、竹山道雄、リッチ、中村正直関係の巻などは『平川祐弘著作集』から割愛せざるを得なくなった。著者としてまことに残念である。平川祐弘代表選集の体裁は維持し得たものの、謹みて購読者諸氏にお詫び申し上げる次第である。

そのような新事態に対処するために、先に第十二回配本で勉誠出版は『小泉八雲と神々の世界』『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』を合わせた大冊で出してくれたが、この第十五回配本では、新規の題名『東の自生観と西の創造観』で一本を組むこととなった。すなわち割愛せざるを得なくなった巻に載る予定であった文章から、日本と西洋に跨る問題を取りあげた文章を選び直して、この新しい巻に集めた。その全七部の趣旨と内容は次の通りである。——

第一部「日本の西洋化」は歴史論文である。

「古代中国から近代西洋へ——明治日本における文明モデルの転換」は『ケンブリッジ日本史』十九世紀の巻に「Japan's turn to the West」を執筆した際の日本語下書きに手を入れたものである。「日本の西洋化」は私

が二十代だった千九百五十年代から六十年代にかけては大問題だった。当時のわが国では日本がどうやって欧米先進国に追いつくかが中心的関心事であった。学問世界ではマルクスはやや衰えたが、ウェーバーの権威は強く、論壇のリーダーの中には「日本はプロテスタンティズムの伝統を欠く。そのために近代市民社会が健全に発達する人間的基盤をもまた欠く」とする、日本の前近代性への批判を繰返して名を成す経済史学者もいた。日本は西洋化せねばならない、そして日本人は「洋魂洋才」を目標にせねばならない、と説教していた。そんな、ないものねだりを言っても仕方がない、という思いもあつて私は『和魂洋才の系譜』を書いて森鷗外を中心に明治日本の「西洋化」を論じたのだが、それが逆に認められて *Cambridge History of Japan* に寄稿することになったのである。(ミル *On Liberty* の中村訳「自由の理」と厳復訳『羣己権界論』の対比と日中両国における「自由」の運命については『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク——中村正直と『西国立志編』名古屋大学出版会、を読まれたい)。ただ私をプリンストン大学に招いたジャンセン教授は心底では洋魂洋才派であつた。その間の機微には著作集版『小泉八雲——西洋脱出の夢』のうしろでふれた。

第二部「東の自生観と西の創造観」は比較文化論である。

右に述べた洋魂洋才論者であり、キリスト教信者である矢内原忠雄や大塚久雄流の欠除体による日本批判に、私は不健康かつ不毛な、無理強いわされたものを感じ、別様の近代化論も述べたが、しかしだからといって神道文化に覚える親しみを口にするとはなかつた。昭和天皇崩御の際、平成元年三月、『文藝春秋』は特別号「大いなる昭和」を出した。そのとき『御神木が倒れた日』と題して寄稿したが、七六四頁の大冊の中で神道文化の観点から天皇を論ずる人の少ないことに私は驚いた。そのころから私は神道的感覚が日本の生活や日本固有の文学の説明にも役立つことをいうようになった。日本のアニミスティックな風土と西洋のキリスト教的風土がどのように違うか、その違いが文学にどのような異なるいろどりを添えるかを分析した。そして大学を定年で去る前後から東西の「自生」対「創造」 *generation versus creation* という世界の生物の誕

生にまつわる認識の違いを口にするようになった。一九九二年夏、ヴァンクワヴァーでの「日本文学に底流するアニミズム」の学会で私が「自然発生」「自己発生」のテクニカル・タームとして *autogenesis* を用いた時、アール・マイナー教授が「今日の発表には難しい術語が出て来たな」と言って「オートジェネシス」と呪いのように繰返した。鶴田欣也教授は私が「地上を匍うみみずにも似た連俳の世界では、たとい一部が切り捨てられようとも、他の部分がこの命でもって生き、またそこから殖えていく。本来は部分であった発句や俳句が独立して生き残るのは、まさにそのためである」というアニミスティックな日本の文学風土の説明に感じ入り「みみず」と繰返した。そんなことを思い出すが、しかし *autogenesis* などと難しい言葉を用いたから七面倒くさく聞こえたので、『古事記』の発生神話と『聖書』の創造神話を、*generation versus creation* として説明すると、多くの読者はすなおに納得するのではあるまいか。それが比較文化研究者としての著者の主張であり、文学論でもあり、さらには本巻全体に通じる基本的な問題提起でもある。そう思うので、「東の自生観と西の創造観」をもって本巻のタイトルそのものにした。

第三部「二本足の人、森鷗外」は本巻で話題となる東西二つの文化に足をそろした代表的人物として森鷗外を解説した。その鷗外は西洋の個人の自由に憧れ、留学帰国後、椽大の筆をふるったが、日常生活では東洋の孝道を重んじ、母親に従った。そのために生じた問題を扱ったのが「鷗外の母と鷗外の文学」である。

第四部「東の橘 西のオレンジ」は一九八一年に出した随筆集と同じ題名だが、原書の半ばを拾うにとどめた。その詳細は「底本」の典を見られたい。本著作集版のあとがきでもふれるが、比較はまず触目の事物から始まる。随筆が読者に近づきやすいジャンルである所以だろう。私も「見て・感じて・考える」という順を尊重したく思っている。

第五部「イタリア」は曾遊の地の中で、風土といい史跡といい食事といい芸術といい、いかにも懐かしい。ダント、ポッカッチョ、マンゾーニなどの翻訳論評などの仕事でしたが、私はそのほかにもヴェネツィアや

フィレンツェなどにふれる機会があつた。若書きの多くは捨てたが、青春の形見になお二、三は拾つて本巻に留める。

第六部「西洋の詩 東洋の詩」は一九八六年に出した同名の一冊から多く拾つた。ただし《芥川龍之介の「盗み癖」》は『諸君！』一九八八年五月号に発表、田中角栄元首相の秘書なる人の好評を得た。文士連は政治家やましてその秘書などの意見は尊重しないかもしれない。しかし率直にいうと、私は文士、文学青年子女に限らず、文芸評論家とか比較文学会役員だとかいう人の大多数の意見などはさらに信じていないのである。俳壇多数派の意見もまたそんな平川とは必ずや違うに相違ないが、私は詩人夏石番矢を鼻眞にしている。『空飛ぶ法王44句』は傑作である。

第七部「画家」は個人的に親しくした人々にまつわる文章である。

思いもかけず、このような形で東西を跨ぐ一卷を編むこととなつた。電車の中で文庫本を読む人の姿が次第に稀な昨今である。しかし成熟した日本社会には大きな活字で読みやすい文章を珍重する読者も必ずやおられるにちがいない。お暇のおりに拾い読みして楽しんで頂ければ望外の幸せである。

東の自生観と西の創造観

口絵解説

まえがき

第一部 日本の西洋化

— 古代中国から近代西洋へ —

— 明治日本における文明モデルの転換 —

はじめに

I 西洋近代文明との出会い

— 書物を媒介とする外国認識 —

1 蘭学の勃興と発展

2 辞書作製の意味

3 「中華」思想と「和魂洋才」

4 蘭学成立期の知的状況

II 幕末維新の渡航者たち — 「実験」へ —

1 世界実見への情熱

2	吉田松陰の「踏海事件」	38
3	新島襄の留学	42
4	西洋への学習の使節たち	46
III	お雇い外国人——「藝術」の師たち	59
1	日本の改革と外国人の雇用	59
2	出身国と統計的実態	61
3	西洋生活様式の流入	64
IV	外来思想・制度の日本の変容——「道德」の相克	68
V	西洋文学翻訳の嚆矢——資本主義の精神	74
1	『ロビンソン・クルソー』	74
2	『セルフ・ヘルプ』と明治の青年	78
VI	日本への回帰——青年期国民の自意識	88
1	「欧化熱」に対する普遍的原理としての「文明」に基づく反撥	88
2	知識人の回帰の原型	91
3	教育の日本化	94
4	『五箇条の御誓文』から『教育勅語』へ	98
	あとがき	102

第二部 東の自生観と西の創造観

儒教の「天」とキリスト教の「天」……………115

VALIGNANO E LA SUA POLITICA DI ADATTAMENTO CULTURALE: L'INFLUSSO

TARDIVO SU NAKAMURA MASANAO, MODERNIZZATORE MEIJI……………141

[God] ~ 「神」……………153

カルデロン『世界大劇場』——文学的創造観との対比における文学自生観……………167

果心居士の消滅——西洋のミメーシスと違うもの……………204

日本文学に底流するアニミズム……………242

芭蕉のアニミズム……………256

第三部 二本足の人、森鷗外……………273

解説 森鷗外……………275

鷗外の母と鷗外の文学……………294

詩人鷗外……………356

ゲーテのイタリアと鷗外のイタリア……………367

カザノヴァを熟読した鷗外……………390

知的刺戟の一樣相——鷗外の『金毘羅』とゾラの『ルルド』……………394

漢字仮名混じり文の美しさ——理論的考察……………406

森鷗外記念会講演——世界文化史の中で森鷗外をどう位置づけるか……………410

第四部 東の橋 西のオレンジ……………447

日曜日の世紀としての十八世紀——朝鮮通信使と燕行使を中心に……………449

東の橘 西のオレンジ——文学的感受性の伝播のあとをたどって……………463

シェイクスピアはお茶を飲んだか……………503

西洋文学と酪酏……………510

イソップ物語——比較倫理の試み……………555

ダンテにおける「甘え」の構造……………618

『クオレ』における「甘え」の構造……………641

第五部 イタリア……………665

マリア様のいる国、いない国……………667

水の都と花の都……………687

I 藝術にあらわれたヴェネツィア……………699

ブラウニング『ガルツピのトツカータ』……………700

国際都市ヴェネツィアの劇作家としてのゴルドーニ……………701

世紀末の風景——鷗外のヴェネツィア物……………721

学匠詩人の手紙——芳賀徹……………726

肖像画からノン・フィギュラティブへ——今井俊満——ティントレット……………735

II 美術にあらわれたフィレンツェ

ジヨットと西欧文芸

ヴァザリーの位置と意味

ブルクハルト『イタリアにおけるルネサンスの文化』

第六部 西洋の詩 東洋の詩

記紀歌謡

『古事記』の黒姫の物語

ハーンの『お前百まで』の英語訳

蕪村、エリュアール、プレヴェール―比較詩法の試み

谷川俊太郎の『生きる』とエリュアールの『自由』

ポーケールの月の影

オーストリアの泉のほとり

失われた青春

監獄の詩三篇

『西洋の詩 東洋の詩』あとがき

芥川龍之介の「盗み癖」

漱石の俳句と外国文学

夏石番矢讀

第七部 画家

夏石番矢に『空飛ぶ法王 44句』

ナチスから「退廃芸術」を守った画商カール・ブッフホルツの生涯

人生のランナー小堀四郎さん

森川章二さまを讃える

平川先生との出会いと再会

あの頃と今

『東の自生観と西の創造観』に寄せて

——林檎の詩人と北方ロマンチズム

索引